

届け 世界の果てまでも

令和4年2月25日 No. 64 文責 校長 飯久保一男



小中一貫校として教育課程を接続します

コロナ禍ということもあって、「オンライン」「リモート」での会話や会議が様々な場面で行われています。物理的な距離があっても対面で話すことができます。日本の人とはもちろん、海外の人とも交流ができます。そこで必要になってくるのが、コミュニケーションのもととなる「言葉」です。世界の公用語は「英語」とされています。

今後、世界との距離はますます近くなっていくと考えられます。様々な国や地域の多種多様な考え方や個性をもった人々と出会う機会は増えていきます。こういう場面では、前号に書かせていただいた「知識」や様々な「道具」を臨機応変に使い、相手と対話をして、理解し合うことが必要になります。その「道具」の一つが「言葉」です。



小学校で外国語*の学習が始まりました。グローバルな世界で生きていくためには、コミュニケーションの道具として「英語」が必要です。こう考えると小学校で英語を学ぶことは当然のことだと思えてきます。

※「外国語」という教科名になっていますが、内容は英語の学習です。

…以前は小学校では英語の授業がありませんでしたので、小学校教員の多くは、大学で英語の指導法は学んでいません。そのために、英語の授業をするには、新たに英語の指導についての研修が必要になりました。教育委員会が主催する英語の指導についての研修会が何度も開催され、また、英語指導の研究推進校が指定され、公開授業に多くの教員が参観して研修しました。小学校の教員は全教科の指導をしますので、教科が増えるということは、全員がその教科の指導について理解していなければなりません。教員の働き方改革・多忙化改善といわれている中でのことです…。



…私は小学校2校に教頭として勤務しました。その2校とも英語の研究推進校でした。特に2校目は文部科学省の指定研究校で、毎年公開研究会を行いました。まるで私の専門教科が英語で、そのために2つの推進校に配置されたかのような感じでした。教頭最後の年には県教頭研究会の研究冊子の英語指導のページの執筆の依頼までありました。

現在5・6年生には「外国語」の授業が週2時間あります。3・4年生に「外国語活動」の授業が週1時間あります。本校では、1・2年生でも「ハロータイム」と称して外国語にふれる授業を年に数回行っています。中学校から新しい教科が始まるということは、前号に書かせていただいた「中1ギャップ」の原因の一つになります。小学校でその学習を始めることで、中学校の授業へのスムーズな移行が行えます。



さらに、小中一貫校となることで、小学校から中学校への教育課程が接続されます。中学校の外国語の教員が小学校の授業を指導したり、中学校の外国語の授業を小学校の教員が参観したりすることで、同一の目標に向かう指導となり、4つの小学校の子どもが1つの中学校で出会っても、同じスタイルで授業が始められます。

中学校では、算数が「数学」になります。図画工作が「美術」になり、体育が「保健体育」になり、家庭が「技術・家庭」になります。教科の名前が変わりますが、学習の内容が大きく変わるものではありません。むしろ、小学校3年生から「社会」「理科」「総合的な学習の時間」が新しく始まること、5年生から「家庭」が始まることのほうが、大きな変化なのかもしれません。

今年度、特別研究部「カリキュラム研究部」を開催し、各教科・領域ごとに小中の系統的な教育課程を検討しました。国語なら4小学校の国語科主任と中学校の国語科の教員、算数なら4小学校の算数科主任と中学校の数学科の教員…、というメンバー構成で、全ての教科や領域において5つの小中学校に共通な、育成する対話力※、重点を置く資質や能力、重点を置く内容などを検討し、4月からの目指す方向を設定しています。



<小学校低学年>

- 行動したこと、経験したことを基に順序立てて考え、自らの思いや考えを伝える力。
- 相手の話を集中して聞き、話の内容を捉える力。
- 相手の発言を受け、自分の思いや考えとつなぐ力。



<小学校中学年>

- 理由や事例などを挙げながら筋道を立てて考え、自らの思いや考えを伝える力。
- 必要なことを聞き取り、話の中心を捉える力。
- 互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめる力。



<小学校高学年>

- 事実と感想、意見を区別し、筋道を立てて考え、自らの思いや考えを伝える力。
- 話し手の目的や自らの意図を応じて、話の内容を捉える力。
- 互いの立場や意図を明確にして、考えをまとめ、広げる力。

<中学生>

- 立場や考えを明確にし論理的に考え、自らの思いや考えをわかりやすく伝える力。
- 論理の展開に注意して聞き、話を評価して、自分の考えをまとめる力。
- 互いの立場や考えを尊重して話し合い、考えをまとめ、広げ、深める力。

※対話力については、次号で書かせていただきます。

…今号も話をやわらかくして脱線して終わりにします。昨年度の校長通信 No. 38 に同様の内容を少し書いています。



保護者の皆さんもそうだったように、私も小学校で英語を学んでいません。私の場合、中学・高校・大学と英語の授業を受けましたが、学習態度が***でしたので、英語を話せるようにはなっていません。英語を話す必要に迫られていなかったことも原因だと思います。そんな私が20年ほど前に、文部科学省の海外研修（今ではこの研修はなくなりました）に行く機会をいただきました。行き先は、英語が母語のニュージーランド（国名が長いのでNZと表記します）でした。NZの幼稚園・小学校・中学校・高校などを参観させていただきました。またNZ独自の教育制度「教育委員会制度を廃止、学校ごとに設置された学校理事会が教育省などに直接要求できる制度」の研修もしてきました。

さて、恐ろしいことに、その研修旅行中は、日本語の全く通じないNZの首都ウェリントンで4週間を過ごすことになったのです。一番困ったのが食事のときです。食事がとれないホテルでしたので、外食に出かけ、英語のメニューを見て、英語で注文し、店員の話す英語を理解しなければなりません。話す・聞くコミュニケーションに迫られました。NZは国旗を見てもわかるように、イギリス系の国ですので、肉料理を注文すると、肉の焼き方以外に、添えられるジャガイモの切り方や焼き方をどうするかなど店員が聞いてくるのです。つたない英語で、必要に迫られ、四苦八苦しながら会話をし、何とか過ごしてきました。そして「英語の通じる国なら生きていけるかもしれない」と変な自信をつけて帰ってきたのです。NZはもともとが移民の国ですので、英語が話せない外国人に親切なお国柄であったことが幸いしていたのですが…。



留学をしてアメリカの家庭にホームステイをし、2・3年もすると英語でコミュニケーションができるようになるといいます。英語を話すこと・聞くことの必要に迫られるからだと思います。